

「台風のえいきょうで、今夜は……ガガ……」
風も強く、ところによつては落雷のかのうせ
いもガガ……ガ……」
（落雷つておいおい、かんべんしてくれよ）
わしはなきたい気分だった。台風のおかげ
で電波も届かないのか、ラジオも聞こえにく
い。しかも停電でへやはまっくら、テレビも
見れない。こわがりのわしはひっしで非常用
のロウソクを見つけ出しあかりをともした。
ふだんはほこりをかぶっているラジオが役に
立った。けれども、これも今にもダメになり
そうで、オレはいの思いでラジオにしがみ
ついていた。
いくらワニでも、こわいものはこわいのだ。
わしはいい年をしたワニだ。だれもが逃げ出
す見た目をしている。大きくてごつごつした
体、ぎろりとした目、とがったたくさんの齒
が口からのぞいている。指先にはするどいつ
めが生えている。
わしを見てこわがらないものはいない。つ

い 最近も、散歩のちゅうでくわした若い
男 はわしを見たたんこしを抜かした。わ
し は人をおそわない。それどころか、だれと
も けんかをしたくない。売られたけんかはぜ
つ たいに買わない。こしをぬかした男がきぜ
つ しているすきにあって家に帰った。
は やく台風がすぎさることをいのりながら
ふ るえていた。その時、とつぜんガタンと大
き な音がしてラジオがたおれた。

「ひやあ」

び っくりしすぎて思わず、いつもよりも一
オ クターブ高い声を出してしまった。とつぜ
ん、ろうそくのあかりの中で、黒く長いかげ
が こちらに向かったのびてきた。

かげのあたまには、つのが見えた。

「お、オニ！」

台 風で、停電で、オニまで現れて……。今
日 は人生最悪の日だ。

ピ カツと、オニがわしに明かりを向けた。
お そらくかいちゅうでんとうだ。目がくらん

で何も見えない。

ああ、もうおしまいだ、と絶望していたら、
明かりが部屋の中をいつしゅうした。そして

最後に女の子の顔が浮かび上がった。

かみをひつつめにし、あたまの高い場所で

ひとつにむすんでいた。さっきオニだと思っ

たのはそのかみのけがツノに見えたからだっ

た。

女の子はおびえた様子もなく、むしろおも

しろがっていた。気の強そうな太い眉毛をく

いっと上げてこちらを見ている。

「ここ、あんたのいえ？」

女の子はかん高い声でそうたずねた。

「そうだよ、わしのいえだ」

こわがられて、さわがれてもやつかいなの

で、出来るだけそつとこたえた。

「そうなんだ、ラジオ、けとばしちゃった」

その時、へやの電気がパツとついた。やっ

と停電が解消されたのだ。ホツとしながら、

目の前にいる女の子を観察した。背はそこま

で 高 く な い 。 そ し て 赤 い 子 ど も ら し い ワ ン ピ
ー ス を 着 て い る 。

「 わ た し 、 ミ ド リ 。 赤 い 服 だ け ど ミ ド リ よ 」

聞 い て も い な い の に 名 乗 っ た 。 太 め の ま ゆ
げ が く い っ と ま た 上 が る の が 見 え た 。

「 何 年 生 ？ 」

「 何 年 生 だ っ て い い じ や な い 、 い ま は ち ょ う

ど な つ や す み 」

「 そ 、 そ う か 。 じ や あ 、 ご 両 親 は ？ 」

「 パ パ も マ マ も 忙 し い の 。 仕 事 だ っ た り 、 し

ゆ み だ っ た り 」

「 つ ま り 一 人 な ん だ な 」

「 そ 、 一 人 で こ こ ま で 歩 い て き た の 。 と ち ゆ

う か ら 降 っ て き た し 、 そ れ な り に ヤ バ か っ た

わ 」

ミ ド リ は ぜ ん ぜ ん ヤ バ く な さ そ う に 言 っ た 。

「 決 め た わ 、 わ た し 、 あ ん た と 行 く 」

な に ？ よ く 分 か ら な い こ と を 言 う 。 お そ る

お そ る 聞 い て み た 。

「 ど こ へ ？ 」

「あんたも知ってるでしょ、ここからすぐの
しかくい家よ」

「ああ、あそこはだれも住んどらんよ」

「分かってるわよ、しかもボロボロ。きつと

オバケが出るよ」

わしがおびえているのを面白がってか、さ

らにおどかすようなことを言った。

あの家はずいぶん昔からあった。そのころ

からだれも住んでいなくて、どんどん古めか

しくなっていた。かべにはつたの葉がおい

しげり、いつの間にか上のほうの窓がわれて、

まるでオバケやしきのようになった。

その前を通るたびに、われたまどからなに

かがこちらを見ている気がした。わしは四本

の短い足を最速で動かして通り過ぎることに

していた。そこへ行くだど？わしまで？なん

てことを言い出すんだ。

ミドリはわしの心の中をのぞきこむように、

アゴを上げ、うすく目をあけて見ていた。

「とにかく、今夜はここで寝かせてもらおうわ。

明日の朝には出発よ」

ミドリは勝手に決めてしまった。そして、自分の荷物からうすい小さな毛布を引っ張り出してわしの布団のとなりに敷き、大きなあくびをしながらその上にねころんだ。

「ひとつ聞いてもいいかな」

わしがそう言うとき、めんどくさそうな顔をしてみえつつあったままうなずいた。

「わし、ワニなんだけど」

「見りゃ分かるわよ」

「あ、そうだよな。で、こわくないのかな」

「こわくないよ」

「そ、そうか、それならいいけどな、いや、わしはお前をおそったりはしないよ。だから

安心して……」

わしはとちゅうで話すのをやめた。ミドリはとつくに深いねいきを立てていた。

あした、どうなってしまうのか、気になつたがとにかく寝ることにした。丸くなつて眠

るミドリに一枚かけてやり、布団にもぐりこ

んだ。
眠っている時はかわいらしいのに：：など
と考えているうちに、わしもいつの間にか眠
りに落ちていった。
よくあさ、まどからのまぶしい光りで目が
さめた。すっかり晴れて、いい天気だった。
「さ、出発よ。行くぞー！」
ミドリがにぎりこぶしを空に向けて、気合
いを入れた。いっぽ外に出ると雨のかおりが
して、しめっぽい空気がただよっていた。明
け方まで降っていたのかもしれない。道のあ
ちこちがまだぬれていた。わしはなるべくぬ
れた所を通らないようにジグザグに歩いた。
ミドリはおかまいなしに直進だ。
しかくい家にはすぐについた。あいかわら
ずツタがおいしげっている。葉っぱは雨でぬ
れて光っていた。
われたまどを見上げると、つたの葉がのび
て半分ほど見えなくなっていた。
葉と葉の間からなにかがのぞいている気が

してぶるっと身ぶるいをした。

「行くわよ」

まようことなく、ミドリは家に近付いた。

それを少しはなれた所からながめつつ、この

まま動きたくないなと思っていた。

「ほら、さっさとしてよ」

なぜかしかられた。

ミドリはカバンから古めかしいカギを取り

出した。つたの葉をかき分けてドアを見つけ

出し、カギあなにさしこんだ。

「お前さんの家だったのか？」

「合ってるけど、合っていない」

ミドリはしばらくガチャガチャとカギを動

かして、ようやくうまく開けた。ギギギイイ

イ、と、さびついた音を立ててドアは開いた。

「さ、行きましたよ」

ミドリが先頭で入って行き、そのあとわし

もついて入った。

家のなかは真っ暗で、われた窓からほそい

ひかりがまっすぐに差し込んでいた。そのひ

かりのなかにたくさんのホコリが舞っているのが見えた。

「オバケ、いないな」

わしがつぶやくと、ミドリは鼻でわらった。

「あったりまえじゃん。おじいちゃんかむか

しここでパン屋さんをしていたの」

「へー！」

オバケとパン屋ならえらいちがいだ。

ミドリはまず窓を開けてから、オープンの中

をのぞいたり、水道のじゃぐちをひねった

り、あちこちを見て回っている。

「ちよっと、手伝って」

ミドリはわしをこき使った。

部屋のすみにあったモップやぞうきんを渡

されて、そうじをするように言われた。なん

でわしが：と思いつつ、言われるがままに働

いた。

ワニもそうじくらいできる。きれい好きな

わしは、徹底的にやることにした。

すっかりホコリもなくなったころ、甘くて

香ばしい香りが立ちこめてきた。いっしょう
けんめい働いたわしのお腹がぐーっと大きな
音で鳴った。
「聞こえたわよ、さいそくの音が」
ミドリがそう言った。目の前のテーブルに
焼き立てのパンがゆげを立ててならんでいた。
そのたまらないにおいにおいの中がよだれでい
っぱいになった。
味はかくべつだった。表面はパリッ、中は
ふわふわ、そしてとろとろのカスタードクリ
ームが最高にうまかった。
ミドリも満足そうにパクついている。おや
じさんもパン屋をしているらしくて、あとは
焼くだけの生地をもらって来たらしい。おじ
いちゃんの店を今度は自分のパン屋にするの
がゆめだそうだ。しばらくは、学校が休みの
たびにこうやって訪ねるつもりらしい。次は
冬休みにこき使われる予感がした。わしは、
それも悪くないなとアツアツのパンに手をの
ばした。